

序 説

『臨床画像』が創刊されたのは36年前の1985年4月で、小生が放射線科医として仕事を始めた翌年である。創刊号の特集は「肝癌の画像診断」で、肝臓の解剖、臨床、画像診断（シンチグラフィ、超音波検査、CT、血管造影）が解説されていた。このような雑誌の利点は、最新の情報を入手できることである。今でも創刊号が手元にあるのは、「研究室紹介」として当時所属していた教室が紹介されており、さらに「誌上カンファレンス」として当時教室で毎週行われていた症例カンファレンスの様子が症例提示のみならず実際のカンファレンスの光景を含め紹介されていたからである。当然、フィルムを提示するスタイルで、懐かしい限りである。

さて、特集「地力が伸ばせる～」は解剖学的領域別に企画が進行中である。このたび、「小児の画像診断」の企画を担当するという貴重な機会をいただいた。小児の画像診断に関する企画を立案する際に頭を悩ませるのは構成である。それは、全身を解剖学的領域別に構成するか、特定の領域を詳細に分ける構成にするか、といった点での悩みである。当然のことながら、それぞれの構成にはよい点とそうでない点がある。悩んだ末、「地力が伸ばせる小児画像診断」と題して、「知っておきたい小児領域の救急疾患」と副題を添え、それぞれの解剖学的領域の救急疾患に焦点をあてた内容とした。執筆をお願いしたのは、画像診断を主な業務あるいは専門領域の1つとして、日ごろから診療、教育、研究にご活躍の先生方である。でき上がった原稿を見てみると、リニューアルされた『臨床画像』のポリシーである、画像を大きくかつ多く掲載する、文章は最小限にし、画像と見るべきポイントをセットした構成で、画像を見て学ぶスタイルとなっていることを理解いただけたと思われる。提示されている画像はどれも臨場感があり、実際に検査室あるいは読影室で画像を目の前にしているかのようである。

小児画像診断を専門としてきた放射線科医の1人として、小児画像診断に興味をもち、これを専門領域の1つとする若手放射線科医が1人でも増えることを心から願っている。

野坂俊介